



Title	クラシック・バレエにおける動きと音楽のダイナミズム
Author(s)	伊藤, 友子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44119
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 伊 藤 友 子

博士の専攻分野の名称 博士(文学)

学位記番号 第 17269 号

学位授与年月日 平成14年9月17日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

文学研究科芸術学専攻

学位論文名 クラシック・バレエにおける動きと音楽のダイナミズム

論文審査委員 (主査)

教授 根岸 一美

(副査)

教授 山口 修 助教授 永田 靖

論文内容の要旨

本論文は、クラシック・バレエにおける動きと音楽との関係について、レッスンの現場におけるその構築という観点を中心に展開した論考であり、目次、論文要旨、本文(4章と「終わりに」)、付記、参考資料一覧、付属音源資料(CD)から構成されている(A4判98頁。400字換算で約300枚)。

第1章「舞踊と音楽—先行研究の検討」では、クラシック・バレエを「ダンス・クラシックの身体技法としての側面を中心に捉える」ことにより、19世紀後半にロシアにおいて確立されたスタイルに基づく作品ならびにその上演と位置づけた上で、ホドギンスやジョーダンらによる研究を検討し、それらに欠けているものは「上演の場における動きそのもの」についての議論であると述べて、本研究への導入的な考察としている。章の後半では、ケアリノホモク、ハンナ、ケプラー、スクラーらの、舞踊人類学や民族舞踊学における研究を概観し、「音楽と舞踊の自然なつながり」についての多面的な議論を紹介した上で、「上演の場を見ていただだけでは気づかない事柄が、舞踊教授の場であるレッスンのなかで、さまざまな形をとってあらわれる」ことを、新たな観察方法の可能性として示している。

第2章「〈奇妙な〉演奏を支える環境」では、クラシック・バレエの教育現場の観察に基づく考察を展開し、教師から生徒への教示について、ヴァーバルとノン・ヴァーバルの区分に収まらないコミュニケーションのさまざまな様態のなかで、音や音楽と動きとの関係が成り立っている有り様を記述している。そして、レッスンの場ではピアノの演奏が、弱拍を強調するなどの〈奇妙な〉有り様を示しているが、それは踊り手の動きの重要な部分に対応するものであると説いている。

第3章「バレエ・ピアニストの果たす役割」では、第2章で確認した要素のなかでも、動きと音楽の関係を探るのに格好の題材である、バレエ・ピアニストの演奏実践をとりあげている。彼らの演奏は、通常のピアニストたちの演奏とはずいぶん異なっており、西洋クラシック音楽のごく一般的な演奏に親しんできた耳には違和感を感じさせるものであるが、それは日々の訓練のなかで行われることにより、踊り手に対して特殊な音楽の聴き方を、そして動きとの対応のさせ方を「すりこむ」ものである、と論じている。

第4章「上演時の音楽における緊張関係」では、レッスンを通して、独特の演奏とともに作り上げられた踊り手の音楽に対する感覚が、ダイナミック・ラインとして形成され、それが本番の上演においては、より「音楽的な」演奏との間に葛藤を生じさせること、しかし同時に、そうした緊張を通じて新たなダイナミック・ラインが形成・再編されてゆくことを述べて、結論としている。なお、本論のあとに「付記」として舞踊譜のシステムであるラバノーテー

ションについての解説が添えられている。

論文審査の結果の要旨

この論文は、バレエにおける「動き」と「音楽」との関係という根本的な問題を、二つの段階における還元を行うことによって解明することを試みており、その点に方法的な新しさを認めることができる。

まず、先行研究についての批判的検討から、両者の関係を直接見出すことの困難さを指摘し、「関係」そのものよりも、どのように「関係」が築かれるのか、ということに目を向けることによって、フィールドワーク的な知の獲得を目指している。食事に喩えれば、「美味しさ」そのものを説明することは困難であっても、素材や調理の仕方を説明することによって「美味しさ」がどのように得られるかがわかる、といった感覚に基づく思考の展開の姿勢である。

次に、「舞踊」を、「振付」という全体的な構造という面ではなく、むしろ個々の「動き」に還元して分析的に捉え、しかもそれを、レッスンの場におけるバレエ・ピアニストの「特異な」演奏との関わりにおいて集中的に観察することによって、音楽と舞踊との関係の形成を具体的に解明しており、この点も本論文の際立った特徴となるものである。

この論文は、本人が長い間バレエを実践してきたことから得た身体感覚をたえず考察の参照点としており、さらにサンクト・ペテルブルクのバレエ・アカデミーや日本のバレエ教室における観察やバレエ・ピアニスト等へのインタビューをはじめ、さまざまなフィールド的な知に基づく、実証的な裏づけの確かな研究となっている。しかしながら、先行研究についての論議と本論文における方法論との間に十分に必然的といえる関連性が見られないこと、また、レッスンの現場を中心に据える反面、リハーサルや本番に関する考察が不十分であることは、短所として指摘されうるであろう。また「受容」の面からの考察がもっと必要であることも考えられる。しかし、本研究は、音楽と舞踊との関わりについて両方の分野に精通した者でなくてはなしえないような数々のすぐれた所見を示しており、舞踊に関わる音楽の在り方の特質を解明した試みとして、音楽学研究への新たな貢献を示すものと判断されうる。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。